

つくるう 伸ばそう 鹿沼の文化

かぬま文化

No.169

発行人 鹿沼市文化協会
発行責任者 会長 鈴木 貢
編集委員会 委員長 黒川 榮三
印刷所 晃南印刷(株)

新春を迎えて

鹿沼市文化協会 会長 鈴木 貢



様に心からお礼を申し上げます。

栃木県文化協会の事業であります「第74回栃木県芸術祭」には会員や市民の皆様が応募され、芸術祭文芸部門では、随筆・田多井祐美子様、小林博様、短歌・小林夏江様、川柳・善林真琴様、美術祭美術部門では洋画・柴田重二様、工芸・大橋滋様、六角春香様、書道・渡邊司寶様が入賞なさいました。誠におめでとうございます。

文化協会の事業や文化祭は、日頃からの修養や訓練を積んで心身を鍛えたり、技能を磨いた姿を演じたり発表する場です。新型コロナウイルス禍は文化や芸術の表現や発表の機会を世界的な規模で奪うという、これまでに経験したことのない未曾有のものとなりました。

このような中で文化協会の事業や活動に、ご支援、ご協力をいただきました皆

た場合の職場や地域の目を心配する声が聞こえてきます。新聞の調査でも過半数を超える人が「ストレスが増えた」と訴えています。また、感染予防のため「マスク着用や手洗」、「三密の回避や社会的な距離をとる」、「不要不急の外出自粛」などの要請がありました。

「不要不急の外出自粛」について誤解や行き過ぎた行動も報道されています。大変残念なことに、文化や芸術の表現を行うことや参加して楽しむことは「無駄なこと」「過剰なもの」とする考え方も散見されました。

音楽や舞踊などを演じ、観賞すること、絵画や書道、写真などの美術を創作、観賞すること、茶道や華道などの生活文化の創造や観賞、文芸の創作や観賞などの文化や芸術活動は、社会において生きがいを持って人間らしく生きていくうえではなくてはならないものです。文化や芸術は、豊作を願う、そして収穫を祝う行事、社会の様々な困難な状況を

乗り越える中から発祥し、多年にわたり伝承されてきた表現活動です。これらは、人々にやすらぎや慰め、勇気を与えてきました。さらに、人と人の関係や社会との関りをより豊かなものにしてきました。

今日の状況の中でも、感染拡大による不安やストレスを軽減させていくために、感染対策を徹底しながら文化や芸術の意義について思いめぐらし、一人ひとりが創造的に文化活動を推進していくことが求められます。

今後の事業や活動は多くの市民との連携、部門、団体を越えた交流などが必要です。会員の皆さまの英知を結集し、人と人の信頼を回復し、生き甲斐を感じる活動を推進していくことが重要でしょう。

昨年の経験を経て、新たな試みや工夫が生まれつつあります。ホール部門やギャラリー部門では入場者の制限や無観客での開催、ケーブルテレビやYouTubeなど



好評を博した医王寺至宝展(市教委提供)

「とちぎの宝医王寺の至宝」を見る

鹿沼史談会 会長 黒川 榮三

鹿沼史談会は、令和2年11月8日、鹿沼市北半

田の医王寺で開催中の「とちぎの宝医王寺の至宝」を見学した。同展は鹿沼まるごと博物館第6回企画展として鹿沼市、市教育委員会、とちぎの宝医王寺展実行委員会が主催。史談会は当日、栗野地区で会員と一般市民向けに「ふるさとめぐり」を行っており、この関連で希望者が合流し、郷土の古刹(こさつ)の歴史に触れ、仏教文化を堪能した。

企画展示解説図録によ

目次

新年あいさつ	1
鹿沼史談会	1
鈴懸短歌会	2
かぬま川柳会	2
文化サークル「みちくさ」	2
鹿沼史談会	3
令和2年度視察研修報告	4
編集後記	4

ると、医王寺は東高野山弥勒院と号する真言宗豊山派の寺院。薬師如来を本尊とし、講堂には秘仏薬師如来坐像、金堂には薬師如来および両脇侍像を安置する。創建は古く、建造物や仏像など30件の県指定文化財、4件の市指定文化財がある。第一会場の金堂には仏像群、第二会場では絵画や仏具、版木類等を展示した。

市全体を屋根のない博物館ととらえる事業で現地開催は初の試み。会場とJR鹿沼駅、東武新鹿沼駅を結ぶ無料のシャトルバスを運行したほか、併催行事をいくつか組み合わせるなど工夫をこらした結果、期間中（10月31日～11月8日）の来場者数は、この種の催し物としては異例の2800人近くに達したという。

関係者は県外からの来訪者も多く、歴史ブームや地域文化への評価の高まりなどが背景にある、と分析。また、SNSなど情報システムの活用が力を発揮したと指摘する。催事をいかに企画し、情報をどう発信して成果に結び付けるか。我々にとっても大事な課題だけに、得る所が大きい視察会だった。

鹿沼鈴懸短歌会の現況

鈴懸短歌会 会長 津吹 節子

私達鈴懸短歌会は、去年の春以来思うような短歌会を出来ずにいる。そして年が明けて増々コロナウィルスの感染症は衰えることなく、目には見えぬがエイリアンの如く鹿沼の町に迫って来ている。そのため来春よりはと期待して情報センターの研修室にて15名のメンバーが密を避けてゆるやかながら窮屈に行ってきた。いずれも高齢のためマスク付けての会話はよく聞き取れず苦心もあるが、皆さん熱心で栗野方面より9名の出席がある。

例年であれば初春歌会が割烹料理店で宇都宮よりの歌友を招き、午前中



江連白潮先生の歌碑巡り

会う事が出来なければ短歌を通してコミュニケーションを深めてゆこうと申し合わせて、コロナ禍の歌を、その終息を願いつつ沢山詠むことを誓ったものである。

○リメイクのならぬ己が身
せめてもと引きし紅さえ
マスクが隠す 小林 夏江

○コロナ禍に打ち勝たんと
も彼岸花見事緋色に畦に
帯なす 鈴木 一恵

○お家時間もう飽きました
来る春は三密犯し無茶し
てみたい 津吹 節子

「いちごいちえ鹿沼川柳大会」と!

かめま川柳会 会長 松本 とまと

第1回と昨令和2年2月の第2回、文化センター多目的ギャラリーに県内外から100名以上の参加者を迎えた大会だが、今年2月23日に開催予定していた、第3回いちごいちえ鹿沼川柳大会は、コロナ禍のため途中から急きょ、誌上大会へ変更する事になった。

昨年、鹿沼市の大会を最後に、全国の川柳大会が中止になっていた。鹿沼は運がいいと、県外の関係者から言われたものだが、残念ながら第3回は誌上大会に切り替えるしかなかった。

第2回までは他県の川柳大会で、いちごいちえ大会のチラシを配布していたが、どこの大会も無いのだから一大事である。選者を依頼した県外の吟社会長に周知をお願いし、また前回参加していただいた参加者には、案内状を郵送することにした。その案内状も、途中から誌上大会に変更した訳で、再び作成しなおして郵送しなければならず、12月は大変だった。

全国誌「川柳マガジン12月号」と「1月号」に「いちごいちえ大会案内」と「変更案内」を載せていただいた

い新人もいるわけで、何よりいばん楽しい例会を目指している。だから、初声賞とユーモア賞には毎回賞品を用意している。

私たちの会が高齢者が多い会なので、今後の目標として、若い会員を増やしたいと思っている。

「人それぞれの思い」を作品に

文化サークル「みちくさ」事務局長 鈴木 純男

文化サークル「みちくさ」は、会員それぞれが日頃生活の中で得た情報や体験した出来事などをテーマに話し合い、相互理解を深める「定例会」を開いています。

そして、それらの内容を会員が作品にまとめたものを持ち寄り、「会誌」として発行することを活

動の柱としています。また、研修会や視察なども不定期で実施しています。

会誌は、第11号まで（2019年12月）発行しました。その内容は、私たちの回りで起きている社会的な問題や、私たちが日頃から思いを巡らせていること、体験や旅の記録、俳句・短歌などな



第9号

発行 2017年8月30日

「みちくさ」では、新会員、寄稿を募集しています。

なお、文化サークル



第10号

発行 2018年11月8日

個人、寄稿を募集しています。

「人それぞれの思い」を表現できればと思っています。



第11号

発行 2019年12月25日

このような状況ではありますが、みちくさ第12号の発行に向けた活動を始めています。

「これまでと異なる生活・社会」が始まっている中で、何が大切で、どう行動するかを個人

ど形式に捉われず多彩になつています。

表紙は、現在鹿沼で活躍されている作家の方々に提供していただいた、油絵・版画・クレイアートなどの作品を使わせていただいています。

会誌の編集には、カットやイラスト、写真などを適宜配置し読みやすさに配慮しています。

掲載する作品は、会員によるものを主として、会員以外の方による寄稿もお願いしています。寄稿による作品は、会員とは少し違った視点からの

見方や考え方があり、会員への刺激や励みにもなっています。

定例会は、月に1回開き、会員持ち回りでテーマを決め発表し、そのテーマをもとに全員で話し合うことや、会員それぞれの体験や旅の報告など何でもありで、食事をしながらの楽しい会となっています。

残念ながら2020年は、コロナ禍によって開催を自粛せざるを得なくなりました。一日も早くコロナ禍が収束し、この定例会が再開できることを待ち望んでいます。

どう向き合う「新型コロナ禍」

鹿沼史談会 会長 黒川 榮三

我々は地域の歴史の現場や文化財などを訪ねたり、講演会、研究発表会、史跡見学会等を開いたりして、郷土史への再認識を深め合うほか、研究機関誌・鹿沼史林と会報・鹿沼史談会ニュースを発行しています。

通常ですと、催し物は現地へ向かうので、会場での説明会などもあります。また発表会は会員と一般市民とが集まる方式なので、新型コロナウイルスの感染拡大が続く状況下では、「三密」回避など、万全の防止対策を講じられないかもしれない。昨年はそう判断して、総会やバスによる史跡見学会、発表会等の集会を取り止めざるを得ませんでした。

今回は久保田堀の視察・研修を中心に、板荷がアンバ様で知られる大杉神社の



久保田堀の地下通水路部分を視察する一行（9月20日・板荷中付近）



栗野川の取水口で説明を受ける参加者（11月8日・栗野町）

鎮座する日枝神社のほか、人参役所跡を見学し、「人参奉行の墓」と呼ばれる3基の墓石のある観音寺を訪ねた。鹿沼市教委の堀野周平さんが案内・説明役を務めた。一方、栗野では、参加者が市文化財保護審議会委員の駒場一男さん（当会前副会長）の案内で栗野川の取水口や整備された水田を見て回った。さらに栗野城址、横尾勝右衛門家の墓所、樹齢千年以上とされる栃木県天然記念物「栗野のカヤの木」を視察して、ふるさと

の歴史や文化への関心の高さを裏付けた。当会スタッフは現地の情報収集や順路設定に腐心したほか、検温器やマスクを事前に調達し、打ち合わせ会も何回か開いて本番に備えた。当日は参加者同士の社会的距離の確保を気遣うなど、感染防止策に全力を挙げた事実もここに特記しておきます。

CATVとの共同取材にチャレンジ

試練の年だったのは確かですが、事業計画の具体化に当たって、新手法に挑戦した年でもあります。「鹿



左手前のTVカメラの前に聞き手(左)と話者(右)が質疑応答した取材風景(9月23日・清洲コミセンにて)

の歴史や文化への関心の高さを裏付けた。当会スタッフは現地の情報収集や順路設定に腐心したほか、検温器やマスクを事前に調達し、打ち合わせ会も何回か開いて本番に備えた。当日は参加者同士の社会的距離の確保を気遣うなど、感染防止策に全力を挙げた事実もここに特記しておきます。

沼史林」が通算60号になるのを記念した特集記事「昭和(戦後)を語る会」の取材方法を、座談会から鹿沼ケーブルテレビ(株)との共同作業方式に切り替えて行った。「密」と接触防止を目的に話し手と聞き手が離れて座り、二人だけで質疑応答し、3台のテレビカメラで録画。テレビ側はそれを編集して後日、放映しました。当会はこの日の内容を記念号に掲載した。窮余の策だったにもかかわらず、鹿沼ケーブルテレビさんには快く協力していただき感謝をさせていただきます。

◆コロナ情勢は極めて流動的だが：

さて、肝心のコロナは年明け早々から終結へ向かうどころか、一段と感染拡大の様相を深め、各地で変異ウイルスが発現するなど地球をすっぽり覆う。県内でも感染者集団が発生。全国的にも1月中旬現在、爆発的感染に歯止めの掛からない状況が続く。政府は東京、大阪、栃木を含む11都府県に緊急事態宣言を発令し、感染の押さえ込みに全力投球。その結果、本県が緊急事態を解除されたのに続き、2月下旬になって一部を除く他の自治体に追隨する動きが出たり、ワクチ

ン接種が始まったりして新局面を迎えた。しかし、医療体制の崩壊や変異種の動向など不安材料が掃されたわけでない。今後の情勢は、今夏の東京五輪・パラリンピック大会を控えて、極めて流動的に推移すると予測されており、今後を見通せない状況は依然続くようです。

令和2年度視察研修報告 古閑裕而記念館・旧堀切邸などを訪ねて

視察研修委員会 篠原 久之

令和2年11月24日、東北自動車道を一路、福島市の古閑裕而記念館へと向かう。コロナ下ではあったが、朝ドラ「エール」人気もあってか、近年にない42人もの参加者を得てバス2台で行く。

記念館2階には作曲をした書齋をそのまま再現。三つの座卓にそれぞれ五線紙をおき、一度に数曲を作曲したという。天才のそれにも勝る努力と作曲への執念を見た。朝ドラもクライマックス

クス、壁一面に張られた写真パネルと略年譜に、参加者ひとりひとりがそれぞれのエピソードに思いを馳せていた。戦後復興、東日本大震災・コロナ終息、古閑裕而の願いと私たちの願いが重なった瞬間があった。

昼食の四季茶房「八夢」は隠れ屋敷の趣き。田園の小道を100mほど歩く。穏やかな陽に照らされた彩りの空間に、和モダンにリノベーションされた古民家。旬の食材の八夢昼膳に時の

流れと真心を感じて「黙食」。次の目的地アンナガーデンは吾妻連峰山麓にある観光スポット。突き抜けた青空に聖アンナ教会はベストショットポイント。欧風の街並に個性豊かな逸品を扱うショップが揃う。

最後に訪ねたのは飯坂温泉の旧堀切邸。江戸時代の豪農・豪商の旧家を補修、復原した。天井は高く、座敷飾りなどの造作も入念。東北の凛とした佇まいを感じる。狭い階段を上ると小部屋もあり当時の生活感をそのままに残している。明治以降は英傑を次々と輩出、近代国家建設に力を尽くした。まさに文化(カルチャー・耕す)

令和3年新しい年を迎えました。希望あふれるはずなのに、昨年から続いている新型コロナウイルス感染症のため自粛の生活になっています。文化協会の活動も中止か制限を余儀なくされ、発表の場はほとんど無い状況です。そのため会報も少なくせざるを得ませんでした。新年会も県文化振興大会も中止、例年行ってきた会報での報告もできません、誠に残念です。

しかし、会長さんの新年のご挨拶、幸い実行できた古閑裕而記念館への研修旅行の様子、史談会の方や、文芸の方々の協力でここに会報が発行でき、本当に良かったと思います。



古閑裕而記念館



旧堀切邸

を地でいった堀切家。現在は地元ボランティアによって守られている。感動大盛りの研修。家族友人とまたゆっくり見たい、聞きたい、食べたい。コロナ下、お世話になったツアー、バス会社等の万全策によって実施することができた。皆様に多謝。

編集後記

今年(丑年)は牛の角のように変わらぬものは大切に、そして牛のように、ゆっくり焦らず慎重に確実に成長していきたいものです。

《編集委員会》

(大貫宗正)

黒川 榮三 板橋 和子
寺崎 昌子 小林 夏江
斎藤千恵子 大貫 宗正